相楽園 船屋形（重要文化財）

相楽園 旧ハッサム住宅（重要文化財）

相楽園 日本庭園

相楽園 総ケヤキ造の正門

小寺家

寄稿 特定非営利活動法人
中浜万次郎国際協会　塚本 宏

語るとすれば、欧米の社会を実体験して自由と民主主義の洗礼を受けながら、大正デモクラシーの波にも乗れず、政党政治による軍閥内閣にも同調できないまま、1930年、37年の2回、連続落選をして中央政界から一旦は身を引いてしまいます。

しかし、戦後になって70歳過ぎの謙吉は、1947年に新たな選挙制度のもと、初代の「公選」神戸市長として見事にカムバックを遂げ、戦災後の神戸の復興に全力で取り組んだのです。残念ながら任期半ばに急逝されたので、僅か2年半の短期間でしたが、彼の尽力のおかげで、市の管理による国際港の建設や、神戸博覧会、高速度鉄道会社などが次々に実現（いずれも没後でしたが）するのです。

そのほか、三田学園の創立（初代校長）、早稲田大学への「小寺文庫」寄贈（3万6千冊を越す「洋書」）など、教育者としての謙吉の面目躍如たるものがあります。

この小寺家と中浜家とが姻戚関係になる経緯を簡単に述べてみましょう（「中浜東一郎日記」から）。

土佐山内藩出身で東京帝大・法科大学長を務めた土方寧（1859-1939）の妻・常子（実は泰次郎の次女）が、実弟又吉（泰次郎の四男）のために仲人役を務め、東京・青山在住の代議士・謙吉と東一郎の麹町宅を頻繁に往来して、当時、学習院女学校在学中の才媛・綾子（東一郎の三女）と東京帝大・工科大学校卒の工学士又吉との婚約を成立させ、又吉の恩師・斯波忠三郎・帝大教授を媒酌人として目出度く結婚式を挙げます（1915年）。

以後、お互いに実父を尊敬していた、東一郎と謙吉は大変ウマがあい、非常に親密な親戚付き合いが東一郎の晩年まで長く続きます。先孝の法事に参列、盆暮れの贈答は勿論、東京、神戸への相互訪問が、当時としては驚くほど頻繁に行われていました。

最後に、又吉・綾子の次女・小寺敏子（1920-2015）は、漢方鍼灸師として国際的にも活躍し（数か国語に堪能）、全国初の鍼灸師会が運営する兵庫鍼灸専門学院の開校に大きく貢献しました。

彼女がこの道に進む道程は極めてユニークです。まず漢文読解力に優れ、「黄帝内経素問・霊枢」（古方漢方）の現代にも通じる知恵に気づきます。しかし古典の理論だけに飽き足らず、臨床の重要性から大阪行岡学園・高等鍼灸マッサージ学校に学び、40歳になって「鍼灸師免許」を取得されます。さらに神戸大学・解剖学教室（武田創教授）で、「経穴の解剖学的解析」も研究されるなど晩学とはいえ、学術研究に基づいた幅広い著述・講演活動により鍼灸界にとって掛替えない人物となります。

万次郎、泰次郎の血筋として、神戸の恩人をもう一人紹介させて頂きました。